
Pocket Book of Japanese Literature

日本文学事典



Pocket Book of Japanese Literature

日本文学事典



平凡社

日本文学事典

定価2,300円

1982年 9月20日 初版第1刷発行

発行者	下中邦彦
発行所	株式会社平凡社
	郵便番号 102
	東京都千代田区三番町 5
	電話 03-265-0451
	振替 東京8-29639
編集・制作	髙平凡社教育産業センター
印刷	株式会社東京印書館
製本	和田製本工業株式会社

©Heibonsha Ltd. 1982 Printed in Japan

不良本は直販小社脱着サービス係までお送りください(送料小社負担)

刊行のことば

近年、日本の文化、とくにその基礎である国語と日本文学を見なおす気運がたかまっています。またその研究の方法も時代の多様化にともない、たんなる文学上のコンテクストをこえて、社会・思想・宗教・芸能・民俗などとの関連のなかでとらえなおす広い視点がより必要となってきました。

しかしながら、古典から現代まで日本文学のすべてを一冊に網羅し、関連分野をもふくめた広い視野に立つ日本文学事典は意外に少なく、本格的かつ実際の事典の誕生が待たれていました。このような今日の要請にこたえるものとして、ここに『日本文学事典』をお贈りいたします。

内容は人名、作品、事項それぞれの項目を中心に、わかりやすい解説を特色とし、巻末には日本文学の流れを理解するための参考として『日本文学年表』を収載いたしました。さらに付録として高校で学ぶ漢文に関する基礎知識をも一覧できるように『漢文要覧』を付け、学生、研究者、文学愛好家のみならず、中学・高校教育の現場でも十分役に立つよう配慮し、過不足ない内容を盛りこみました。

本書は、平凡社版『国民百科事典』全17巻に収録された日文学関係の項目をもとにして、さらに新たな項目を大幅に追加し、1750項目に再構成したのですが、『国民百科事典』日文学分野の編集については、古代・中世は佐竹昭広先生、近世は広末保先生、近代は猪野謙二先生の監修をいただき、また今回の追補編集にあたっては、とくに小田切進先生に助言と協力をいただきました。

末尾ながら『国民百科事典』ならびに今回新たにご執筆いただきました諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

1982年9月

平凡社『日本文学事典』編集部

凡 例

〔A〕 見出し語について

見出し語は〈仮名見出し〉と〈本見出し〉の2本立てとした。

仮名見出し

本見出し

へいあんじだいぶんがく 平安時代文学

〈仮名見出し〉について

1. 日本語(日本慣用の字音読みによる漢語を含む)は平仮名、外国語(外来語を含む)は片仮名とした。日本語と外国語の合成語は日本語の部分は平仮名、外国語の部分は片仮名とした。

えんげき 演劇

アバンギャルド

キリシタンぶんがく キリシタン文学

2. 日本語の平仮名表記は〈現代かなづかい〉で表し、〈おう〉と〈おお〉、〈じ・ず〉と〈ぢ・づ〉も区別して表記した。

おうらいもの 往来物

おおうた 大歌

〈本見出し〉について

1. 人名は原則として姓・名の順とし、生没年を西暦で入れ、日本人名は日本年号を〔 〕内に入れて付記した。西洋人名は原語つづりで表記した。なお、仮名見出しはファミリーネーム、〔 〕内にパーソナルネームを入れた。

あらわはくせき 新井白石 1657～1725 (明

暦3～享保10)

キーン [ドナルド] Keene, Donald Lawrence 1922～

2. 作品名・雑誌名などはくゝでかこんだ。

げんじものがたり 〈源氏物語〉

ぶんがくかい 〈文学界〉

〔B〕 項目の配列について

項目の配列は五十音順に配列し、促音(つまる音<っ>)・拗音(<キャ、キュ、キョ>)のように仮名2字で表される1音節のものも音順に数え、清音→濁音→半濁音の順とした。なお長音符号は音順に数えなかった。

〔C〕 本文について

1. 本文の記述は簡明な口語文とし、敬語、難解な漢語の類はなるべくさけた。
2. 漢字は〈常用漢字〉、仮名遣いは〈現代かなづかい〉を原則とするが、固有名詞、歴史的用語、原典からの引用などは例外とした。
3. 原則として〈当用漢字音訓表〉にあるもの以外の漢字には振仮名を施した。ただし、〈当用漢字音訓表〉にある漢字でも、難語、難訓または読みちがいのおそれのあるものには振仮名をつけるようにした。
吃音¹ 標榜² 上方³ 石橋⁴
4. 直送項目は⇒の矢印で送先を示し、参照送りは→の矢印で、文中、文末に適宜示した。

あ

た別種の自然美もありうることを啓発した。

藤井 敏樹

あえはこうそん 愛蔵書村 1855～1922(安政2～大正11) 小説家、劇評家。本名与三郎、別号竹の屋主人。江戸生れ。1874年読売新聞社に入社。江戸文学に造詣が深く、また外国文学にも関心をもち、当世の風俗人情を描いて評判となる。代表作は『当世商人気質』『人の噂?』『蓮葉娘?』など。劇評としては役者の評判記をしりぞけ、脚本中心に論じ、役者の演技を鋭く批評する点に特色があった。明治20年前後の新旧文学交代期に文壇に登場し、のち根岸派の中心となった。 浅井 清

あおいのうえ 葵上 能の四番目物。世阿弥の伝書にも記載があり、近江猿楽?系?の古能を世阿弥が改作したものとされている。出典は『源氏物語』の葵の巻。六条御息所?の嫉妬?の生霊?が、ライバルの葵上(舞台正面にのべられた1枚の小袖?で表現)を打ちこらす前段、鬼形となって駒者(ワキ)の法力と抗争する後段とに分かれ、演出の変化とテーマのおもしろさで上演頻度第1の曲。海外でも多く上演され、三島由紀夫の近代能の題材ともなっている。しかし、2人出てきた生霊の同伴の1人を省略し、そのせりふをことごとく巫女(ツレ。生霊を呼び寄せる役)にうたわせるなど、無理な改作のあとが残る。怨霊?のすごさのなかに、元皇太子妃としての品位を見せるものも至難である。 増田 正彦

あととぞうしはなのにしきえ 青砥稿花紅彩画 歌舞伎脚本。河竹黙阿弥?創作。世話物。5幕。別名題『弁天娘女男白浪?』。通称『白浪五人男』『弁天小僧』という。3世歌川豊国の役者見立て錦絵?『白浪五人男』をヒントに書かれた白浪物の代表作。文久2年(1862)3月江戸市村座で初演。19歳の5世尾上菊五郎の弁天小僧が評判をとり、出世芸となった。盗賊弁天小僧は兄貴分の南郷力丸とともに大盗賊日本駄衛門の手下になるが、一方、信田家の家臣赤星十三郎(郎)も、ふとした機縁で家来忠信利平?とともに一味となる。弁天小僧は娘に化け、浜松屋をゆすり、居合わせた駄右衛門がわざと見破ってその夜浜松屋を襲う手はずのところ、浜松屋の息子は駄右衛門の実子、弁天は浜松屋の実子とわ

あいこのわか 愛蔵書 説経(→説経節)の作品。中世の語り物である説経の中では内容が複雑で、前後二つの部分から成り立っている。主人公愛蔵若が父二条蔵人清衡の後妻雲井の前の邪恋をこぼんだため、激しい憎しみを買って、館?を追放されるまでの前半と、館を出た愛蔵若が、おじの阿闍梨?のいる叡山?を訪ね、そこで天狗?と間違えられて乱暴され、失意と絶望から山中を放浪した果てに霧降庵?で投身自殺する後半とである。説経における思想的な特色は、母や妻、姉の母性愛的な愛情に守られて、主人公が不遇な運命に耐え、これを克服するところにあるが、この作品は継母の不倫の恋を軸にしており、しかも愛蔵をはじめ108人もの集団入水自殺で終わっている。これはこの作品が、愛蔵を後に日吉山王?権現としてまつ縁起?として描きながら、実は説経の世界の崩壊と終焉?を暗示したものであったといえよう。江戸時代の浄瑠璃?に竹本義太夫の正本?都富士?、紀海音の『愛蔵若時節?』がある。

岩崎 武夫

あいづやいち 会津八一 1881～1956(明治14～昭和31) 美術史家、歌人、書家。別号は秋神道人?、渾斎?。新潟市生れ。早稲田大学英文科卒業。明治の末ごろから奈良を巡り、古寺や仏像を題材にして万葉調の歌に詠んだ。代表歌集は『南京?新唱』『鹿鳴?集』。また早大で東洋・日本美術史を講じ、1934年『法隆寺・法起?寺・法輪寺建立年代の研究』で文学博士となった。独自の風格をもつ書は書跡集にも編まれ、歌碑も多い。

保田 正夫

あいびき ありびき 二葉亭四迷の訳説小説。1888年『国民之友』に連載。原作はツルゲーネフ『罪人日記』より。秋たけなわの樺林で、農夫の娘アクリーナに素封家の下男グィクトルが別れを告げる場面を「自分」が目撃するという話。時代の水準をはるかに抜き出した言文一致体の完成は、並行して二葉亭が書き進めていった『浮雲』の文体修練の役割を兼ね、また伝統的な自然観とは違っ

かり、因果に驚く。捕手に追われた5人は稲瀬川¹⁸に勢ぞろいして逃げるが、弁天な追い詰められて極楽寺山門の上で立ち腹を切り、ほかの4人もとらえられる。〈辰松屋〉で娘姿の弁天の肌ぬぎになったのたなか、〈稲瀬川〉の勢ぞろいのつらねなどが見どころ。

小笠原恭子

あおねこ 〈青猫〉 萩原朔太郎の第2詩集。1923年刊。17年から22年までに諸雑誌に発表したものから55編を選んで収める。表題について著者は、〈青猫〉の〈青〉は英語のBlueを意味し……〈希望なき〉〈憂鬱なる〉〈疲労せる〉等の語意を含む言葉として使用した、と説明している。これはこの詩集の特徴の指摘ともなっており、疲労感・倦怠感が全体をおおいつくしている。朔太郎的な世界が最もよく示されている詩集。

笠井秋生

あおのすえきち 青野季吉 1890～1961(明治23～昭和36) 文芸評論家。新潟県佐渡の生れ。1915年早稲田大学英文科卒業。読売新聞記者などを経て、国際通信社に入社、同僚の平林初之輔、市川正一らと雑誌〈無産階級〉を発行、社会主義の研究に志す。22年、〈心靈の滅亡〉を発表して文芸評論家として認められ、〈種蒔く人〉に参加、以後プロレタリア文学の理論家として活躍した。とくに〈自然成長と目的意識〉(1926)はプロレタリア文学運動に目的意識を導入したものととして、運動の急進化に一時期を画す。その前後、終始〈文芸戦線〉の理論家として活躍、昭和期には〈戦旗〉派に対立するリーダーであった。評論集に〈転換期の文学〉〈マルクス主義文学闘争〉〈実践的文学論〉〈文芸と社会〉がある。日中戦争の進行中〈人民戦線事件〉に連座して入獄、転向した。戦後、日本文芸家協会会長を務め、日本芸術院会員となった。 森山重雄

あかいとり 〈赤い鳥〉 大正時代の童話・童謡運動を代表する児童雑誌。小説家→鈴木三重吉¹⁹により1918年7月創刊、29年3月に休刊、31年1月復刊し36年三重吉の死まで続いた。〈赤い鳥〉創刊にあたって三重吉はまず、童話と童謡が芸術であることをねらいとし、当時の文壇の第一流の作家、詩人に執筆を呼びかけた。このことは童話、童謡の地位を向上させたばかりでなく、児童読物に新しい文

体と内容を盛り込むことともなった。このほか児童劇の開拓、芸術的童謡曲譜の作成等も〈赤い鳥〉の大きな功績であった。北原白秋、西条八十の童謡、芥川竜之介、菊池寛、宇野浩二、佐藤春夫その他の童話、久保田万太郎の児童劇、成田為三、山田耕筰²⁰らの童謡曲譜がこうして生まれた。また三重吉の娘方²¹指導、白秋の児童自由詩の開拓、山本鼎²²の自由画の運動等、児童自身による表現の改革も〈赤い鳥〉誌上で行われ、児童教育の面からも大きな業績を残した。

桑原 三郎

あかぞめえもん 赤染衛門 平安時代中期の女流歌人。生没年未詳。960年(天徳4)ころ出生、1041年(長久2)以後没か。赤染時用²³の娘だが、実父は平兼盛ともいいう。藤司²⁴殿原倫子²⁵(藤原道長の室)の女房。大江匡衡²⁶に嫁し、道長の周辺では〈匡衡衛門〉と呼ばれた。同時代の歌人和泉式部の奔放自在とは対照的に、正統、穩健な歌風で、実生活においても夫の匡衡や息子孝周²⁷を助けて良妻賢母であった。〈栄花物語〉正編の作者として有力視されているが、確証はない。 今西祐一郎

あかとくろ 〈赤と黒〉 詩誌。1923年1月創刊、24年6月終刊。全5冊。赤と黒社発行。岡本潤、萩原恭次郎、壺井繁治、川崎長太郎の同人4人で発足、後に小野十三郎²⁸も加わる。〈詩とは爆弾である!〉と宣言でうたい、過去・現在のすべての価値を否定し、あるのはただ我が生のみという主張から、詩の変革を模索した。性急な主張は当時必ずしも詩作の成果を伴わなかったが、この片々たる雑誌の影響は大きく、アナーキズム詩の先驅となった。

林淑美

あがわひろゆき 阿川弘之 1920(大正9)～小説家。広島市生れ。広島高校を経て東京帝国大学国文学科入学。高校の終りころから福岡の同人雑誌〈こころ〉同人となる。1942年東大卒業、予備学生として海軍に入り、通信隊報²⁹に従事した。第2次世界大戦後、復員上京して小説を書きはじめ、谷川徹三や志賀直哉の推挙で〈年々歳歳〉(1946)を発表。さらに、52年完成した〈春の城〉で読売文学賞を受け、作家としての地位を確立した。これは自伝的な作品で、戦争下の青春を描いた異色

の戦争文学である。以後、長編では、広島の実爆被災者のその後の状況を描いた『魔の遺産』(1953)や特攻隊として戦死した飛行科予備学生の手記をもとにした『雲の墓標』(1956)、短編では『夜の波音』(1957)、『青葉の翳り』(1960)などが手がたいリアリズムで注目された。ほかに伝記『山本五十六』や『暗い波濤』などがある。

大久保 典夫

あきたうじやく 秋田雨雀 1883～1962(明治16～昭和37) 劇作家。本名徳三。青森県生れ。早稲田大学英文科卒業後、小山内薫の『新思潮』の編集にたずさわり、1909年創立された自由劇場の会員となって創作活動を始め、『第一の晩』『埋れた春』を発表。13年島村抱月の芸術座に参加したが、翌年、沢田正二郎とともに脱退。大正中期からしだいに社会主義思想に共鳴し、21年創刊された『種蒔く人』の寄稿者となり、その2年後に佐々木孝丸らと土蔵劇場(先駆座)を創立、プロレタリア演劇運動に力を注いだ。この間に戯曲『國境の夜』『手投彈』『骸骨の舞跳』などを発表するかわら、『太陽と花園』など数多くの童話によって、独自のヒューマニズムを唱道した。34年新協劇団の結成に参画して、戦中の困難な演劇活動を支えたが、戦後は舞台芸術学院の院長となって多くの門下生を養成。貴重なドキュメント『秋田雨雀日記』がある。

菅井 幸雄

あきのよのながものがたり 秋夜長物語 14世紀の成立と推測される御伽草子。永和3年(天授3・1377)の古写本が伝存する。作者不詳だが僧の作であろう。比較的山の桂海・律師が三井寺(園城寺)の稚児・梅若と契りを結んだが、梅若は天狗にさらわれ、叡山と園城寺の間の戦いとなり園城寺は全焼する。梅若は自責から投身自殺し、桂海はこれを機縁に悟りをひらく。いわゆる稚児物語の代表作である。

鎌田 善郎

あきみち 室町時代の御伽草子。作者未詳。父を盗賊に殺された「あきみち(秋道)」は、愛妻をかたうて敵と契りを結ばせ、油断させて復讐をたくらむが、成就せぬうちに妻は敵の子を生む。しかし妻はくじけず、用心堅固な敵を巧みにあざ

むき、ついに夫に敵討を果たさせ夫婦とも仏門に入る話。情況や心理のあやがこまかく描かれ、復讐物の佳作である。この話のちに『浅井了意の『日本』(廿四孝)中の『山口秋道』にも出てくる。

鎌田 善郎

あくたがわりゅうのすけ 芥川竜之介 1892～1927(明治25～昭和2) 小説家。別号、柳川隆之介、我鬼、澄江堂主人など。東京市京橋区入船町で牛乳販売業耕牧舎を営んでいた新原敏之、ふくの長男として生まれた。生後7か月ころにふくが発狂したため、本所区小泉町のふくの実家芥川家で養育された(1904入籍)。芥川家は代々御奥坊主を務めた下町の旧家で、礼儀作法にきびしく、義理人情を重んじ、歌舞音曲、絵画、文学などに親しむ文人的、通人的趣味の濃い家庭であった。このような家庭のふんいきと本所の下町の風物は、彼の精神形成に大きな影響を与えた。聡明だが、虚弱で感受性の強い少年として成長した彼は、府立三中、一高を経て、東京帝国大学英文科を卒業。一高、東大時代の友人に菊池寛、久米正雄、恒藤恭、成瀬正一、松岡譲などがいた。

大学在学中、友人たちからの感化もあって創作への意欲をおこし、1915年11月、『帝國文学』に『羅生門』を発表し、12月、夏目漱石の門に入った。16年2月、第4次『新思潮』に発表した『鼻』が漱石の賞賛を得て、文壇登場への足掛りをつかんだ。同年、横須賀の海軍機関学校に英語の教授嘱託として就職、作家と教師の「不愉快な二重生活」を送るなかで、『戯作三昧』『地獄愛』『奉教人の死』などを発表し、作家の地位を固めた。19年3月、創作活動に専念するため機関学校を辞職し、大阪毎日新聞社に入社。このころから歴史小説を主とした従来の傾向とは違った作品が見え始め、20年4月の『秋』をはじめとする現代小説に新領域の開拓を試みた。

21年大阪毎日新聞特派員としての中国旅行を境として、健康の衰えがめだつとともに創作力も減退し、『保古物』など自己の体験を作品化したものが多くなった。また時代の新しい流れや社会問題、人生問題により深い関心を示すようになった。25年1月の『大導師信輔の半生』は、創作活動の行詰りを打開し、新しい方向を示そうとする作品であったが、

このころから激しい神経衰弱に悩まされるようになった。そして《点鬼簿》などに見られるように、〈僕〉という一人称を用いるとともに〈死〉とか〈発狂〉を扱った作品が多くなっていく。27年、義兄西川豊の自殺など、身辺の雑事にわずらわされるなかで、死を前にした不安と絶望を→《河章》→《幽車》→《或阿呆の一生》などに描き、《西方の人》を書き上げた後、多量の睡眠薬を飲んで自殺した。自殺の動機については、遺書の一つ《或旧友へ送る手記》に〈将来に対するぼんやりした不安〉と述べられているが、そこには母が狂人であったことからくる発狂の不安、健康の衰え、処世上の不安、芸術上の問題などがこめられていたといえよう。

墓は東京染井の墓地にあり、命日の7月24日には毎年〈河章忌〕が営まれる。森本修

あけらかんこう 朱楽菅江 1740～1800(元文5～寛政12) 江戸中期の狂歌師、洒落本作者。本名山崎景貫、狂名は漢江とも書く。江戸の生れ。幕府の与力で、安永年間(1772～81)ころ洒落本の筆を染めていたが、唐衣橘洲鶴、四方赤良(→大田南畝)らと狂歌に興じ、1783年(天明3)赤良と→《万載狂歌集》を刊行して天明狂歌隆盛の契機をなした。つづいて85年には狂歌集《故厩馬鹿集》(《狂言鶯蛙集》ともいう)を編んでいる。庶民的で仲間を菅江連と称して晩年まで狂歌を捨てず、没後は妻が節松嫁々々を名乗って菅江連をとりしきった。 伏見逸男

あさいりょうい 浅井了意 1612～91(慶長17～元禄4) 江戸時代前期の仮名草子作者。京都二条本性寺住職。松雲、瓢水子、昭儀坊などの別号がある。寛永から元禄にかけ、ほぼ半世紀にわたる近世文学の啓蒙時代に、仮名草子のほとんど全分野について精力的な活躍を示した近世最初の大作家。経歴は明確ではないが、上、農、工、商と分断された各階層のそれぞれの心情をつかみ、文学的に形象化し得たことは、僧という階級制から一段ずれた位相に立つことから説明し得るだろう。とりわけ、身分社会からの脱落者、浪人たちの追い詰められた疎外意識を、この時点としてはできるかぎり先鋭に表現したことは注目し得る。もちろん、仮名草子作家としての

活動は、了意にとって副次的なもので、仏教関係書が約1000巻に近く作られているが、その中にはかなり疑わしい本も含まれている。大衆啓蒙家として、思想家としての了意研究は、今後の課題である。代表作の→《浮世物語》のほか、如曇子(？)の→《可笑記》をうけた《可笑記評判》、中国怪異小説を巧みに日本の風土にとり入れ、一種の歴史小説の面をも開いた→《加婢子》、その続編ともいべき《狗張子》、日本再編成に対応する旅行ブームの反映としての→《東海道名所記》《江戸名所記》等、多彩多様な著作があり、後世に与えた影響はきわめて大きい。弟子に林義雄がある。 松田修

あさかしや 浅香社 落合直文主宰の短歌結社。社名は直文の住所、東京の本郷浅草町にちなむ。弟鮎貝槐園、門下与謝野鉄幹が中心となり、青年子女約40名を集めて、1893年に創立され、短歌革新に志した。機関誌をもたず、短歌、歌論を《日本》《自由新聞》《こゝろ新報》などの新聞に発表した。おもな社友に大町桂月、塩井雨江、堀内新泉らがあり、ことに鉄幹をはじめ服部羽治、尾上柴舟、金子薫園などは、明治30年代の新派和歌草創期にそれぞれ活躍し、社としての活動期間は短かったが、史的意義は大きい。

新聞進一

あしかががっこう 足利学校 下野国足利(足利市)にあった中世唯一の学校施設。創設については諸説あって一定しないが、上杉憲実が1439年(永享11)に書籍閲覧規定を設け、また鎌倉川覚寺の禅僧快元を招いて座主(校長)とし、校規を定めるなど学校としての体裁を整えた。この後、憲実の子孫や北条氏が保護を加え、7世座主九華(1578没)の時に最も盛んで、坂東の大学としてヨーロッパにもその名を知られた。来学者はほとんど僧侶で全国から集まり、授業は易学の修得を中心として兵法、医学などにも及んだ。江戸幕府も保護を加えたが、私塾や藩校が発展するとしだいに衰退し、1872年校務を廃した。現在旧聖堂の建物を保存するとともに足利学校遺跡図書館が設けられている。

藤守すみ

あしび 《馬酔木》 短歌雑誌。1903年(明治36)6月～08年1月、通巻32号。根岸短歌会発

行。伊藤左千夫を中心とし香取秀真¹、岡田²、
蔵真³、長塚節⁴ら9人の編集委員で創刊、
石原純、島木赤彦、古泉千樞⁵、平福穂⁶、
三井甲之⁷、斎藤茂吉⁸らも参加。正岡子規の
短歌思想を受け継ぎ、写生と『万葉集』歌風を
尊重したが、小説や翻訳小説も掲載した。末
期から三井甲之が編集の中心になり、08年2
月から『アカネ』に引き継がれ、09年9月の
『アララギ』発行へと継承された。久保田 正文

あしび 〈馬酔木〉 俳句雑誌。1928年に〈ホ
トトギス〉系の〈破魔弓誌〉(1922-)を改題、
31年主宰者の水原秋桜子¹が同誌に〈自然
の真と文芸上の真〉を発表、〈ホトトギス〉
から独立した。清新な主情や連作俳句で昭和
初頭の→新興俳句の有力誌と目され、石田波
郷、加藤徹郎²らの新鋭を輩出、戦中戦後の
激変期をのりこえて俳壇最有力誌として現在
にいたる。81年秋桜子の没後は堀口星眠³が主
宰。 太田 登

あしやどまんおうちかがみ 〈蘆屋道満
大内鑑〉 浄瑠璃¹、歌舞伎狂言の作品。俗
称〈萬の葉〉。竹田出雲作。享保19年(1734)
10月、大阪竹本座初演、江戸では、元文2年(17
37)9月の中村座。五段の王朝物で、歌舞伎に
移されたのは、寛延3年(1750)8月の大阪角座
である。和泉国信太森の白狐が安倍保名と契
って安倍晴明を産んだ、という異類婚の伝説
によったもので、先行したものには〈信太妻〉
系統の古浄瑠璃があり、紀海音作の〈信田森
女占〉などをもとにして、さらに歌舞伎の諸
作からもとり入れて、信太妻戯曲を集大成し
たもの。筋も複雑で場面の変化に富んでいる。
東宮の外戚左大将元方と小野好古の確執に蘆
屋道満と安倍保名を対立させ、晴明の生立ち
におよぶ王朝物で、とくに四段目の〈萬の葉
子別れ〉が全曲のクライマックスであり、今
日上演される場面である。道満にうとんぜら
れた安倍保名は、信太森で白狐を助ける。白
狐は恩に感じて、許婚の萬の葉に化けて保名
と契り、のちの晴明を産む。そこへ本当の萬
の葉姫がたずねてくるので、白狐は〈恋しく
ばたずねきてみよ〉の歌を書き残して去る。

郎司 正勝

あすか井 飛鳥井家 藤原氏、花山院流の
一門で、羽林¹家の一つ。東大寺とも縁が深

い。難波家の3世頼経²(?~1216。『吾妻鏡』
による)の子の雅経³(1170~1221)に始まる。
雅経は、父から相承して蹴鞠⁴に長じ世に
重んぜられ、また俊成⁵に学んで和歌をよ
くした。『新古今和歌集』の選者のひとりで、
『千五百番歌合』の歌人にも選ばれた。以後、
蹴鞠の家として、また、歌道でも、二条家に
準ずる名家として栄えた。7世雅世⁶(1390
~1452)は『二十一代集』の最後の集『新統
古今和歌集』の選者。8世雅親⁷(1417~90)
は広く古人の書を学んで書家としても1流
(飛鳥井流、栄雅流)を開き、飛鳥井家は書の
家としても著名になった。能書できこえる足
利義尚⁸、尚通⁹流の近衛尚通、のちに二条
流を開く13世雅康¹⁰(1569~1615)などがその
流れをくむ。中世、近世を通じて事績が多い。
明治に至り伯爵。 新井 栄蔵

あずまあそびうた 東道歌 東国芸能の歌の
意で、平安時代に宮廷や寺社で演じられた舞
楽中の歌謡をさす。はじめは必ずしも一定の
様式をもたなかった東道が、延喜(901~923)
ころには方式がきまり、歌も一歌・二歌・駿
河¹舞・求子²歌・片陣³とその次第が勅
定された。このうち駿河舞(4首)と求子歌
(1首)が中心をなし、前者は民謡風で内容・
形式ともに古い伝承にもとづいた歌謡と思わ
れる(例：千鳥ゆゑに／浜に出て遊ぶ／千鳥
ゆゑに／あやもなき／小松が梢⁴に／網な張り
そや／網な張りそ)。後者はくちはやぶる
賀茂の社の姫小松万代⁵経とも色は変らじ
という藤原敏行⁶の和歌(『古今集』巻二十)
をもとにしている。本来の求子歌の歌詞が忘
れられて敏行の和歌で代用するようになった
ものであろう。 石倉 誠

あずまうた 東歌 東国の歌の意で、『万葉
集』巻十四の全歌238首の総称。歌の作者、集録
者、集録事情等は未詳。総歌数の約40%を占
める国名が判明している歌(東海道の遠江¹、
駿河、伊豆、相模、武蔵、上総²、下総³、
常陸と、東山道の信濃、上野⁴、下野⁵、陸
奥⁶、計12国)を巻の前半に、国名不詳の歌を
後半に配し、それぞれを雑歌⁷、相聞⁸、譬
喻歌⁹の部立¹⁰を基本として部類するなど、
かなり整備された巻であるが、ごく少数の歌
を除いては、すべて広義には相聞的な内容の

あたか

歌である。文化的に異なる地域と意識された東国の短歌を1巻に集め、地名以外は1字1音のいわゆる→万葉仮名で表記している。方言の忠実な表記を意図したことなどから、使用仮名字母の種類等において、東国人の歌を→万葉仮名書した巻二十の→防人歌集よりも畿内の視点からの選択を経ており、中央から派遣された官人、東国から上京した勧業者等の交流に伴い、畿内地方短歌の強い影響下に成立している。しかし、農耕、狩猟等の実生活を反映した序詞、懸詞、詠の技法を多用し、野趣的な譬喩が少なくない。このように、素材や歌調ばかりではなく、発想の特異さをも残し、さらに生活共同体内の祭祀、集会、共同作業等で歌われた共同財産としての歌謡の息吹をも保っている。なお、《古今和歌集》巻二十の末尾に、国名を明記した(陸奥、常陸、相模、甲斐、伊勢)短歌13首(作者不明)が《東歌》として、賀茂社の→東遊歌ととともに収められているが、もはや東国特有の香気は失われている。

神淵 忍

あたか 〈安宅〉 能の曲名。四番目物。観世信光の作。武士の情を強調した歌舞伎→《勧進帳》の原典としても名高いが、関守の富樫(ワキ)と山伏に身をやつし奥州へ落ちのびる途中の弁慶(シテ)一行との力の衝突に演出の中心がある。山伏一行も能のほうが多人数を登場させる。関をぬけるための謀議、法力による威嚇、にせの勧進帳の読上げ、見破られた義経(子方)を打つ弁慶の苦衷、力による圧倒から主従の愁嘆、再び接触する関守との薄氷を踏む酒宴、そして危機の脱出と緊迫した舞台を展開する。

増田 正造

あたらしきむら 新しき村 →武者小路実篤『あたらしきむら』

あづちおうかんき 〈安土往還記〉 辻邦生『あづち』の小説。1968年『展望』に発表。南フランスで発見された書簡断片という架空資料を基に構築された長編小説。16世紀末イタリア・ルネサンスを知るイタリア人通訳と織田信長の1年にわたる交渉を描く。戦国期の日本を西欧の目をもってみよという斬新な手法によってコジモ・デ・メディチに匹敵する信長像を創出した。世界的視野で人間をとらえるス

6

ケールの大きさがこの作品に活力を与えている。芸術選奨新人賞受賞作。

中川 成美

あづまかがみ 〈吾妻鏡〉 鎌倉幕府開創期から中期までの幕府の事跡を記した史書で、52巻から成る(うち第45巻欠)。1180年(治承4)から1266年(文永3)に及ぶが、その間欠けた年月日も少なくない。和漢文で記され、編年体であるが、日記ではなく、幕府や武士の家に伝来した文書、記録や公家からの日記、社寺の記録などを材料として編集したもの。編集者は幕臣とみられ、その時期は、前半の源氏将軍3代の分は文永年間(13世紀中ごろ以降)、それ以後の分は正応年間以後(13世紀末～14世紀初め)と考えられている。鎌倉幕府(関東)の史書(鏡)というので《吾妻鏡》と呼ばれているが、江戸時代の儒者は中国風に《東鑑》とも書いた。写本には数種あり、島津本、北条本、吉川本などが名高い。編集ものだけに誤りも少なくないが、鎌倉幕府政治史および武家社会史研究の最も重要な史料とされている。

新田 英治

あづまもんど 〈吾妻問答〉 宗祇の連歌論書。《角田抄》ともいう。1467年(文正2)(一説1470年・文明2)宗祇が関東下向のさい隅田川近くで若者に答えた形をとり、26条から成る。連歌の史的特色、稽古・修練、風体、付合、執筆の作法その他を実際に即して説いたもので、→二条良基の連歌論書《筑波問答》と並んで尊重された。

山根 信正

アナーキズムぶんがく アナーキズム文学 アナーキズムが日本で初めて思想として展開されたのは、幸徳秋水によってであったが、大正期に芸術論と結びつけられて新しい文学の創造を促すものとなったのは、→大杉栄によってであった。大杉は人間のあらゆる感性の真の自由な解放を求め、自由と創造を現実の全時点で捕捉しなければならないとする。そのことを大杉は〈生の拡充〉とよび、それはすなわち労働者の〈生きんとする本能〉だとした。大杉の思想に一貫して流れているものは、疎外の問題である。その疎外を解決するために労働者の意識との一体化をはかる。ここに新しい価値の担い手としての労働者階級を見いだすのである。新しい文学は、労働

者階級の欲するところの〈叛逆の美〉に裏打ちされなければならない。このような大杉の思想を創作で実現したのは、虐げられた者の反抗精神を描き、その反抗精神ゆえに自滅する労働者を主人公とする宮島資夫の『坑夫』(1916)であった。また荒畑寒村の初期の小説などもその例にあげられよう。

大杉、荒畑、宮島らが、実践運動を伴いつつ階級社会における人間の意識の解放をめざしたとすれば、雑誌→『赤と黒』の詩人たちおよびダダリスト高橋新吉に代表されるアナーキズムとは、芸術様式の変革をめざしたものであった。大杉の虐殺(1923)以後、政治を相対化していく目を失ったアナーキズムは、昭和期に至って運動体としてではなく、詩人・作家の個々の成果として実っていった。

林 淑美

あにいもうと 〈あにいもうと〉 室生犀星 1934年『文芸春秋』に発表。川師の人夫頭、赤座の息子伊之助とその妹もんを主人公にし、巷にひしめきあい、葛藤しながら生きる人間をうきぼりにした。野性的で乱暴な兄とその兄にすまじい咬阿をきける妹とのけんかを通して生の肉親愛を描いている。犀星の『市井鬼もの』の代表作。文章も独得で、その文体が作品に迫力をもたらしている。第1回文芸懇話会賞を受賞。

本多浩

あねさきまさはる 神崎正治 1873～1949(明治6～昭和24) 宗教学者、評論家。嘲風と号した。京都出身。1896年東京帝国大学哲学科卒業後、おもに東大で、宗教学を研究し、教職に就き、日本における実証的な宗教研究の確立を果たし、インド学、仏教学、哲学の分野でも多様な業績を残した。文芸評論、文明批評などの分野でも活躍、さらに国際的文化交流にも尽くした。高山樗牛との交友は有名で、呼応してロマン主義を宣揚した。著書は『印度宗教史』『法華教の行者日蓮』など多い。

石田慶和

アバンギャルド 既成の芸術意識や表現の改革をめざす芸術運動の総称。神原泰次郎や平戸康吉らの未来派、高橋新吉らのダダイズム、キュービズム、表現主義などを含み、雑誌→『赤と黒』のアナーキズムも加えられる。未来派の運動の始まった1921年ころから、こ

れ秩序破壊をめざした芸術運動は盛んになり、リアリズムからの脱却が根本をなしていた。プロレタリア芸術運動の尖鋭化とファシズムによって分化し、閉塞していった。

佐藤秀明

アフォリズム 人間や社会・自然・文化などについて省察し、その本質を的確かつ短かに鋭く抉る文章のこと。箴言、警句、金言、格言などと訳される。世界最古のアフォリズムとして有名なヒポクラテスの〈芸術は長く、人生は短い〉は、本来は医学的な要諦を説いた書物『箴言』第1章冒頭の一節〈生命は短く、学術(医学)をさす〉は長い。……のやや変形したもの。また、『パンセ』第6章『哲学者たち』の一節を要約した〈人間は考える葦である〉も、アフォリズムの箴言として知られている。アフォリズム自体が、思想的骨格を表すスタイルとして、あるいは独自の文学形式として評価されるものに、ラ・ロシュフーコーの『箴言集』や、オスカー・ワイルド、ニーチェらの作がある。日本では、芥川竜之介の『傀儡師の言葉』(例えば「人生は落丁の多い書物に似ている」などを含む)や、萩原朔太郎の『虚妄の正義』などが、その代表的著作とされる。

浅野洋

あぶつに 阿仏尼 ?～1283(弘安6) 鎌倉中期の歌人。若く安嘉門院に仕え、女房名を越前、四条などといった。のち歌壇の長老→藤原為家の側室となつて為相・為守を生んだ。剃髪して阿仏尼といったが、為家の死後継子の為氏と実子為相の播磨・細川荘の相続争いを幕府に訴えるため鎌倉へ下った。そのときの紀行が『いざよひ日記』で、保争の解決をみる前に没した。一説に60余歳かという。阿仏尼の和歌は『安嘉門院四条百首』『安嘉門院四条五百首』その他に見られ、古風な技法のうちに情味を込め、『続古今集』以下の勅撰集にも多くとられている。若いころの恋の悩みや旅日記をしたくうたたねや、為相のために為家の歌論をまとめて書き送った『夜の鶴』などがある。吉原節二

あべいちぞく 〈阿部一族〉 森鷗外 1913年『中央公論』に発表、同年、歴史小説集『意地』に収める際に改作した。藩主細川忠利の死に殉死

した武士たちのなかで、主君の許しをえないで腹藏を切った阿部弥一右衛門の一家が悲劇的な運命をたどったさまが描かれ、封建武士の社会で殉死という行為が形だけのものになったことが批判されている。囃外の歴史小説の系列からいえば「歴史其儘」の作品に属する。

長谷川泉

あべこうぼ 安部公房 1924(大正13)～小説家、劇作家。本名公房。東京生れ。満州奉天市(現在の瀋陽)で育ったが、成城高校から東京帝国大学医学部に進み、1944年奉天に戻って終戦を迎え、同地で社会秩序のすさまじい崩壊のさまを目撃した。帰国後、48年には満州での体験をもとにした「終りし道の標へ」を発表して「近代文学」の同人となった。また「夜の会」のメンバーになり、同会の花田清輝の「シュールレアリスムとマルクス主義の綜合」という理論に大きな影響をうけ、「デンドロカカリヤ」ほかの寓話的短編を書いた。51年、名前を失った男が壁に変身する話「壁——S.カルマ氏の犯罪」で芥川賞を受けた。52年、「人民文学」に参加。既成価値の崩壊という戦後の状況に、実験的な方法によって乾いた表現を与えるのが彼の作品の特徴で、「第四間水期」のようなSF、「棒になった男」ほかの放送劇、戯曲による実験を経て、62年の「砂の女」にまで到達する。砂丘地帯に迷い込んで、女のいる砂の穴に閉じ込められる男を主人公にしたこの長編小説は、20世紀後半の疎外状況のユニークな表現として国際的に評価が高い。この後「他人の顔」「燃えつきた地獄」「箱男」などの長編を発表しているが、その中心主題は、共同体的また人格的諸価値の完全な解体を表現することによって新しい価値を模索することにある。

渡辺広士

あべじろう 阿部次郎 1883～1959(明治16～昭和34) 評論家、哲学者。山形県生れ。一高を経て東京帝国大学哲学科卒業。1909年夏目漱石の門にはいり、小宮豊隆、安倍能成らと「東京朝日新聞」文芸欄その他で文芸評論を書き始め、以後、「影と声」(小宮らとの共著)、「三太郎の日記」「倫理学の根本問題」「美学」など一連の著書によって、人格主義的理想主義的思想を形成し、大正中期の指導的評論家の一人となった。他方、幸田露伴らと

もに芭蕉詩研究会をつくり、芭蕉再評価の重要な仕事も残した。23年東北帝国大学教授となり、美学の体系化やゲーテ、日本文化史の研究をすすめ、「徳川時代の芸術と社会」(1931)、「世界文化と日本文化」(1934)など多くの研究書を書き、その他ゲーテの翻訳、随想集「秋恋記」(1937)など優れた活動をした。大正期教養人の代表的な存在として、その著書は多くの読者をもってきた。

西垣勲

あべともじ 阿部知二 1903～73(明治36～昭和48) 小説家、評論家、英文学者。岡山県生れ。八高を経て東京帝国大学英文科を卒業。在学中に舟橋聖一、北川彦彦、久板栄二郎らと同人誌「朱門」を創刊、短編「化生野」などを発表。1930年「日独対抗競技」「白い士官」を「新潮」に発表して文壇にデビュー、モダニズムの斬新な着想と文体で注目された。同年、最初の短編集「恋とアフリカ」を「新興芸術派叢書」の一冊として刊行。次いで最初の評論集「主知的文学論」をまとめ、人間性の混沌や矛盾を理性によって追究しようとする文学方法を、T. S. エリオットやH. リードらから学んで唱え、モダニズム派を代表する理論家としても活躍した。舟橋聖一らとの「行動」廃刊後、1936年「文学界」同人となり、同誌に「冬の宿」を連載、昭和10年代前後の知識人の孤独と苦悩をなまなましくとらえ、反響を呼んだ。この一作で流行作家となった後も「幸福」「北京」「街」「風雪」「光と影」などを次々に発表、ファシズムに抵抗しながら多くの問題作を残した。戦後は「黒い影」「人工庭園」「月夜の窓」「白い塔」など、社会的関心の強いヒューマンな力作の長編のほか、優れた評論集「ヨーロッパ紀行」「歴史のなかへ」「世界文学の流れ」などを残した。また英文学者としてもバイロン、ハーディー、メルビル、ワイルド、フォークナーらの多くの翻訳、研究がある。

小田切道

あべのなかまろ 阿部仲麻呂 698～770(文武天皇2～宝龜1) 遣唐留学生。唐朝の官吏。姓は「阿部」が、名を仲麻呂とも記し、入唐後「阿倍」と改めた。717年(養老1)第8次遣唐使に加わり、吉備真備らと出発し、真備は735年(天平7)帰国したが、仲麻呂は帰国を許されなかった。753年(天平勝宝5)遣唐大使とし

て渡航した藤原清河らと唐僧鑑真とに会い、日本への伝道を請うた。鑑真は渡海に成功した、仲麻呂は難航してふたたび唐に戻り、そのまゝ唐朝に仕えて一生を終えた。新刊『唐書』には、友多く書を読み博識で、在唐50年、左散騎常侍鎮(安)南都護に任ぜられたとあり、李白の送詩もある。《古今集》の「く天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも」の歌は唐で詠んだもの。 平野 雄雄

あべよしげ 安倍能成 1883～1966（明治16～昭和41）哲学者。愛媛県生れ。東京帝国大学哲学科卒。在学中に夏目漱石門下に入り、卒業後『東京朝日新聞』の文芸欄に文芸時評を寄稿、反自然主義の文芸評論家として迎えられた。また『西洋近世哲学史』（1917）などを刊行、大正教養主義の一翼になった。教育者として京城大教授、一高校長などを歴任。戦後は文部大臣をつとめ、また学習院院長としても活躍した。

片岡豊

あまくさほんへいけものがたり 天草本〈平家物語〉 日本人イエズス会士ハビアンが口語の問答体で要約した『平家物語』。1592年(文禄1)刊。ローマ字で書かれ、表題は「日本の言葉とイストリア(歴史)を習い知らんと欲する人のために世話(日常語の意)にやわらげたる平家の物語」とある。キリシタン版の一つで、イエズス会の学校の日本語教科書として出版された。室町時代の口語を知る貴重な資料である。 関宏

あみのきく 網野菊 1900～78(明治33～昭和53) 小説家。東京生れ。日本女子大英文科卒業。早大露文科の聴講生にもなる。一貫して志賀直哉に師事し、1926年短編集《光子》を刊行。簡潔にして手堅いリアリズム手法による私小説作家として文壇に登場。結婚後満州に移住したが、離婚してふたたび作家として活躍。戦後はとくに複雑な骨肉の愛憎をつとリアリズムの文章で率直に描いた。《金の棺》《さぐりの花》《ゆれる筆》《一期一会》などの代表作がある。

紅野路

あめりかものがたり 〈あめりか物語〉 永井
荷風の短編小説集。1908年刊。4年間の滞米
生活中の見聞・体験を創作風にあるいは随想

風に極ったもの。ゾラからモーパッサン、ボードレールへと影響をうけた作家も多様であれば、純然たる見聞記風の小品『市俄古語の二日』があるいっぽう、復古的候文体の作品『夜あわき』もあるといった具合に方法も多岐にわたる、あの荷風小説の世界の豊饒^{トヨカサ}を約束する一冊といつてよい。

豊井 淑郎

あゆめいしょう【脚結抄】 文法書。富士成
章が著。1778年(安永7)刊。5巻。成章は
言葉をと挿頭さうとうと、名、接あひ、脚結けつに4分し
たが、脚結は今日の助詞、助動詞などにあ
たる。脚結を性質により「属しよ、家け、倫りん、身み、
隊たい」に5分類し、それぞれの用法や意義を詳
述した。例歌を八代集などから引き、その当
時の話し言葉での訳し方を示し、助詞、助動
詞の接続の仕方を明らかにしたもので、広範
にして精緻な考察は日本文法の研究史上空
前のものである。しかし、成章の用語には耳
なれぬものが多く、弟子も多くはなく、優れ
た学説も明治時代まで受け継がれなかった。
なお【脚結抄】の巻頭には、動詞、形容詞な
ど活用を「變頭へんとう」に幅けられている。

あゆかわのぶお 鮎川信夫 1920(大正9)～
詩人。本名上村隆一。東京生れ。早稲田大学
を中退し応召。1947年《死んだ男》を発表し
て詩的伝統を断ち切る戦後詩の出発を告げた。
同年、北村太郎、三好壽一郎らと→《荒地》を
復刊し、現代詩の支柱として活躍。その詩業
は《鮎川信夫著作集》全10巻としてまとめら
れている。 片岡 豊

あらわはくせき 新井白石 1657～1725(明暦3～享保10) 江戸時代中期の学者、政治家、詩人。名は君美哉、号は白石その他。父に従って初めに総久留藩主七尾利元に仕えたが、同家の内紛にまきこまれ、次の頼直の代に追放。その後26歳の時に大老堀田正俊に仕えたが、正俊の横死のため6年後にまた浪人となった。1693年(元禄6)師木下順庵の推薦で甲府綱登の侍講となり、1704年(宝永1)綱登が5代将軍綱吉の世継として家官と改名、江戸城西の丸に入った後も、経書、史書の講義を担当した。09年家官が将軍家となるとからは、政治顧問の役割を果たす。家宣は元禄15年、類編み合は説きその他、前代の御政の概略を

改廃、朝幕間の融和、金銀貨改良、長崎貿易
 南正の着手や日鮮外交の修正、農政面の成果、
 かずかずの名裁判など、白石の献身的な補佐
 によって多くの治績をあげ、その施政は次代
 家継とあわせて「正徳の治」と称される。
 改貨と貿易南正は、家継の代に完成され(後者
 の結実が「海舶互市新例」)、8代吉宗にもう
 けつがれた。16年(享保1)家継の業績、吉宗
 の將軍職就任とともに、白石は幕閣を去って
 学問に専念することとなり、歴史学を初め地
 理学、言語学、文学(詩)、民俗学、考古学、
 宗教学、有職考、武学、本草学等、多方面
 にすぐれた業績を残した。《古史通》《古史通
 或問》《読史余論》《藩翰譜》《采覧秘異
 言》《西洋紀聞》《東雅》《白石詩草》《蝦夷志
 》《南島志》など多くの傑作があり、→《折
 たく柴の記》は自伝文学の代表とされる。博
 学の点でフランス百科全書派に比べられるが、
 その学問とくに史学と洋学との後世への影響
 はきわめて大きい。その先駆的業績と影響の
 大きさから、白石は「日本近代科学の父」と
 呼ばれることもある。また一方で詩も巧み
 で、その詩は朝鮮、琉球、中国にも知られて
 いた。

宮崎 道生

あらきだもりたけ 荒木田守武 ⇨ 守武

あらきだれいじょ 荒木田麗女 1732~1806
 (享保17~文化3) 江戸末期の物語作者。伊
 勢内宮権禰宣詮の荒木田武遠の娘。17歳から
 連歌を学んだが、22歳で結婚。夫の影響もあ
 って物語の制作に入る。歴史物語の《池の藻
 屑》《月の行方》は最もよく知られるが、他
 に物語《山の井》や紀行《初午の日記》な
 どがあり、《麗女文集》《麗女句集》も編まれ
 ている。物語は平安朝文学の模倣にすぎぬと
 いうが、その学識と雅文の達者さは注目さ
 れる。

杉本 久

あらくれ 《あらくれ》 徳田秋声の代表作。
 1915年1月から7月まで《読売新聞》に連載、
 同年9月新潮社刊。養父母のたくらんだ男と
 の結婚をきらい飛び出したお島は、後妻に入
 ったかん詰屋に裏切られ、山の温泉宿の主人
 との仲をさかれ、怠け者の洋服商の打算にが
 まんがならず、やがて目をかけていた若い職
 人との生活をめくろむに至る。男まさりで逆

境にめげず、自分の生活は自分で開いていく
 という行動的なタイプの造形は、従来の秋声
 にはめずらしく、開放的な時代に対応する作
 家の進展を思わせる。観察や描写力の深切さ
 をもって評価が高いが、文字どおりあらくれ
 た女の積極的な生が、無自覚性の遍歴とい
 う相を宿してとらえられているところに、色
 濃く自然主義的人間観がうかがわれる。

榎本 隆司

あらたま 《あらたま》 斎藤茂吉の第2歌集。
 アラギ叢書第10編として1921年刊。13年
 から17年までの作746首を収録。処女歌集
 →《赤光》後期の作風を受け継ぎつつ、次
 第に東洋的な自然観照に歌風の基礎を確立し
 た。《実相観入》という茂吉独自の写生説が
 形成される底流には、この集中の「あかあか
 と一本の道とほりたりたまきはる我が命なり
 けり」「ゆふされば大根の葉にふる時雨とい
 たく寂しく降りにけるかも」などの歌が響い
 ている。

太田 登

あらはたかんせん 荒畑寒村 1887~1980(明
 治20~昭和55) 社会運動家。横浜市出身。
 高等学校卒業後、横須賀海軍工廠の見
 習職工となり、《万朝報》を通じて堺利彦、
 幸徳秋水、内村鑑三らの影響を受けた。1904
 年社会主義協会に入会、平民社にも参加する
 中で、足尾銅山鉱毒事件に取材した《谷中村
 滅亡史》(1907)を世に問うた。大逆事件以後
 の《冬の時代》に堺とともに社会主義運動
 を守り、日本社会主義同盟(1920)、日本共産
 党(1922)の創設に加わった。その間かんに
 小説なども書いたが、昭和初年以後はいわゆ
 る労農派として活動し、人民戦線事件などで
 数回入獄した。第2次世界大戦後、日本社会
 党の結成に参加し、46年衆議院議員となっ
 たが、翌年脱党、以後独自の運動を続けた。
 《寒村自伝》がある。

榎本 哲哉

あららぎ 《アララギ》 正岡子規にはじまる
 →根岸短歌会の流れを代表する短歌同人誌。
 《馬酔木》の後をうけて、1908年千葉県で創
 刊されたが、09年9月から東京の伊藤左千夫
 のもとに発行所を移した。子規の唱えた写生
 と万葉主義とを発展させ、大正時代中期に
 は歌壇の中心勢力となり、これに拠るアラ
 らギ派を広く《アララギ派》と称した。長塚節

をはじめ、初期以来活躍した斎藤茂吉、運営の基礎を確立した島木赤彦のほか、岡麓¹、古泉千鶴²、中村憲吉、歌畑空³、土屋文明⁴ら有力な諸歌人が輩出。とくに昭和以後は主として文明の指導下に独自の生活詠を開拓し、現在も歌壇最大の機関誌としての位置を占めている。《万葉集》の研究でも多くの業績を残しており、会員の歌集その他を収めた《アラギ叢書》がある。戦後、この系統に属する多くの地方誌も創刊された。現在、吉田正俊を発行人として数名の選者を中心に運営されている。

本林勝夫

ありあけしゅう **〔有明集〕** 蒲原有明¹の第4詩集。1908年刊。《ゆうめいしゅう》ともよぶ。薄田泣菫²の《白羊宮》と並び日本象徴詩の到達点といわれる。→《春鳥集》以後模索してきた新詩型はここにはほぼ確立した。漢語を交じえた雅俗折衷の文語体はドラマチックな叙情性をたたえ官能的ですらある。しかしその高踏的で退嬰³に傾きかねない作風は次代の詩人には迎えられず、以後有明は詩壇をいとい訣別⁴した。創作詩40編、訳詩4編が収められる。

中川成美

ありましたけお **有島武郎** 1878～1923(明治11～大正12) 小説家。東京生れ。有島生馬¹、里見淳²の兄。父武郎³は実業家として産を成した。武郎は学習院を経て札幌農学校(現在の北海道大学)に学び、在学中にキリスト教に入信、札幌独立教会に入会し、内村鑑三⁴の指導下に熱烈な信仰者となった。1901年同校卒業、一年志願兵として兵役に服した後、03年9月からアメリカに留学、ハーバード大学、ハーバード大学で歴史と経済学を学んだ。このころから教理上の疑問や、自己内面の霊肉二元の葛藤⁵により信仰に動搖をきたし、学問にも興味を失い、文学書を読誦、また社会主義、無政府主義にも触れた。とくにホイットマン、イブセン、トルストイ、クロボトキンからは生涯にわたる深い影響を受けた。3年間の留学を終え、ヨーロッパ諸国を巡遊して帰国、08年札幌で母校の教授に就任し、翌年神尾安子と結婚した。やがて信仰から離れ、教会から脱会するとともに、10年4月、武者小路実篤⁶らが創刊した《白樺》に加入、文筆活動を始めた。14年末、妻の病氣のため教職

を辞して一家帰京。16年、妻と父とを失い、翌17年から本格的な作家活動に入り、力作《死と其前後》、→《カインの末裔》《迷路》《生れ出づる悩み》などにより一躍人気作家となった。その旺盛な筆力は19年前半に書き上げた→《或る女》において頂点に達し、他の追隨を許さぬ作風を確立。その後も聖書に取材した《三部曲》、長編小説《星座》、長編評論《惜みなく愛は奪ふ》、その他多くの評論等において、格調の高いヒューマンイズムと深い学殖とをもって若い知識人をひきつけ、文壇外において特異な地位と名声とを獲得した。彼の思想と文学には、聖書に学んだ人類愛、トルストイに学んだ人間性への深く広い理解と同情、クロボトキンに学んだ無政府主義的社会主義など、人道主義的な一面と、ホイットマンやベルグソンから学んだ、個性の自由で創造的な発展拡充を生命の第一義とする愛己的個人主義の一面とがあった。彼はその両面から、人間性に対して抑圧的な現実社会の機構や道徳習慣に強くプロテストするとともに、抑圧され疎外された人間性(個性)の全的回復の可能性を、一見醜とも邪とも見えるアナーキーな生命のほとばしりのなかに探り出し、そういう強く豊かな生命力、創造力の追求に芸術家としての使命を見いだした。しかし第1次世界大戦終結後に激化し始めた社会主義運動、労働運動を眼前にして、有島は有産階級出身者たる自己の階級性と自らの抱懐する思想との間のギャップに悩み、財産放棄、北海道狩太⁷の有島農場の無償開放など、真摯⁸に生活改造を試みた。それにもかかわらず、自らの思想を積極的なものに転化することができず、虚無的絶望感を抱いたまま、最後は人妻波多野秋子と軽井沢で情死を遂げた。

安川定男

ありまのおうじ **有間皇子** 640～658(舒明天皇12～斉明天皇4) 孝德天皇の皇子。天皇没後、再び即位した斉明(最初は皇極)天皇とその皇子中大兄¹の政權に対し有間皇子の立場は微妙で、蘇我赤兄²らにはかられ兵を起そうとして捕えられ、絞首された。時に19歳。《万葉集》巻二に紀州へ護送される途次、磐代³で詠んだ哀切な歌2首があり名高く、後人の同情をひいたが、一説に皇子の心中を察した親近者の作ではないかともいう。

石倉誠

ありよしさこ 有吉佐和子 1931(昭和6)～作家。和歌山県生れ。東京女子大在学中より『演劇界』に寄稿していたが、卒業後第15次『新思潮』に参加した。出世作『地唄』(1956)は親しんできた古典芸能に材をとった作で、以後このモチーフでいわゆる才女時代を築いた。一方母の郷里紀州を舞台に『紀の川』(1959)、『助左衛門四代記』(1962～63)といった旧家の年代記的作品を発表、長編作家の力量を示した。特にこの系列では『華岡清洲読書』の妻』(1966)が話題をよんだ。その卓越した行動力により世界を回り社会問題にも鋭い目を向けた。ミリオンセラー『恍惚』(1972)、『複合汚染』(1974～75)はその代表的作品。現代女流作家の第一線にあり、自作の劇化舞台の演出などにも活躍。

中川 成美

ありわらのなりひら 在原業平 825～880(天長2～元慶4) 平安時代の歌人。平城天皇の皇子阿保親王の五男。母は桓武天皇の皇女伊登内親王。はやく兄の行平とともに臣籍に下り、在原氏を賜り、近衛中将となって在五位中将と称された。従四位に至り、死去の前年には藏人頭くらねに任ぜられた。歌は、大胆な表現の中に豊かな余情を含むところに特色があり、『古今和歌集』に至る和歌隆盛のさきがけとして、重要な位置を占めている。『古今集』の序には「六歌仙の一人としてあげられ、心余りて詞足らず」と評されているが、同集には30首もの歌が選ばれており、六歌仙の中でも最高である。『土佐日記』にも2か所にその名が見え、一時代前の歌人として慕われていたことがわかる。私生活の面で、恋愛などの奔放なふまいが多かったらしく、彼の歌の多くはそこから生み出された。そのような彼の行動は、歌とともに、早くから周辺の人々によって歌物語に作られていたらしく、『古今集』の彼の歌には、とくに長い詞書を伴ったものが多い。それらの歌物語を中心に作り上げられたのが『伊勢物語』であり、そこに描かれた主人公の姿を通して、彼は「みやび」や「色好み」の典型とみられるようになった。その影響ははるか後世にまで及び、さまざまな作品の素材となっている。山本 豊朗

あるおんな 〈或る女〉 有島武郎の長編小説。1911～13年『白樺』に連載した『或る女のグ

リップス』を19年3月、補筆改稿して『或る女』前編として刊行。つづいて後編を書きおろし6月に刊行、完成した。この作品は、明治30年前後の浪漫主義的思潮の高揚期を背景に、女主人公早月葉子(国木田独歩の最初の妻佐々城信子がモデル)が『時代の不思議な目覚め』を経験して、生まれながらの才知と勝気と多感な性情とをもって旧弊な周囲に反抗し、〈自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動〉に突き動かされて、世間からは畢竟とされるような奔放な生き方と男性遍歴を繰り返したすえに、肉体、精神ともに破滅に至る運命を作者特有の華麗で情熱的な文体で描き出したもの。〈新しい女〉の一典型を周囲の社会的現実を見すえながら浮彫にした、日本のリアリズム文学の最高傑作の一つとして高い価値をもつ作品である。

安川 定男

あるおんなのえんけい 〈ある女の遺書〉 舟橋聖一の小説。1963年刊。和泉式部の男性遍歴を背景に、自殺した叔母伊勢子のパトロンで今は政治家の泉中との愛敬地獄から逃れることのできない稚子?の葛藤を描く。国文学の素養を生かしながら競花の幻想美の世界にも自在に出入りしつつ、『雪夫人絵図』以来の女の魔性の問題を、〈夏子もの〉によって確立された〈二号もの〉の枠組において追求した、一種集大成的な快作である。

藤井 敏樹

あれち 〈荒地〉 詩誌、『荒地』派の機関誌。1939年創刊の戦前の同人誌『荒地』を、47年9月復刊したもので、田村隆一、鮎川信夫あさひ、三好豊一郎、黒田三郎、木原孝一らが執筆。戦中体験による人間疎視を重厚に敷いて、近代詩に新しい理性による詩的秩序の回復をめざして戦後詩の一つの方向を定めたが、48年6月終刊。誌名はT.S.エリオットの同名の詩にちなむ。後に『荒地詩集』8冊、『詩と詩論』2冊が出た。

安藤 靖彦

あんざいふゆえ 安西冬衛 1898～1965(明治31～昭和40) 詩人。奈良市生れ。大阪府立堺中学卒業。1919年大連に渡り、満鉄に入ったが、寒気による右膝関節炎で右脚切断。療養中詩作に入り、24年北川冬彦らと『亜』を創刊、28年『詩と詩論』の同人となり、新散文詩運動を推進した。34年帰国し堺市役所